

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 11 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24792496

研究課題名(和文)入院中の病児のいるひとり親家族の家族機能と家族支援の構築

研究課題名(英文)Family functioning of and family support to single-parent families with hospitalized children

研究代表者

平谷 優子 (HIRATANI, YUKO)

神戸大学・保健学研究科・助教

研究者番号：60552750

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：入院中の病児のいるひとり親家族の家族機能のありようを明らかにすることを本研究の目的とした。母親を対象に半構成面接調査を実施した後、家族機能尺度を用いた質問紙調査を実施した。病児の入院に関連した家族環境の変化により、家族全体に負担が生じていた。家族と社会との関係に関連した家族機能は低下していた。母親は病児やきょうだいに対する心配事を抱えていた。付き添いや面会の交代は困難であり、役割過重により、体調を崩している母親が存在した。社会資源を活用することで、家族の経済的負担は軽減していたが、母親はスティグマを感じていた。家族員の相互支援と身内からの支援は、家族の生活に良い影響をもたらしていた。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to clarify the family functioning of single-parent families with hospitalized children. Semi-structured interviews were conducted with single mothers of hospitalized children, and the Feetham Family Functioning Survey was administered. The changes in family environment associated with the children's hospitalization led to increased role burden on the entire family. The relationship between family and society was significantly lower. Mothers found it difficult to share their worries with their hospitalized children and the children's siblings. Since no other person could substitute the mother's role, mothers experienced significant health issues due to role overload. Increased social support can ease financial burdens; however, an increased contact with society could lead to greater distress in mothers because of the stigma associated with being a single parent. Effective support from family members and relatives could positively influence the lives of these families.

研究分野：医歯薬学

キーワード：家族看護 家族機能 ひとり親家族 病児 入院

### 1. 研究開始当初の背景

家族員である子どもが入院するという健康問題に直面すると、家族機能が変化し、家族や家族を取り巻く環境に大きな影響を及ぼす。わが国において家族は多様化しており、特に、増加しているひとり親家族では、親にかかる負担が過剰であり、家族機能を良好に維持することが難しいため、危機対処能力が低いひとり親家族の場合は、子どもの入院に対応できずに家族危機に陥る可能性が考えられる。

ひとり親家族の家族機能に着目した先行研究には、離婚を経験した養育期のひとり親家族の家族機能について質的に検討した報告や子育て期のひとり親家族の家族機能について量的に検討した報告、養育期のひとり親家族の親の雇用と親子関係の視点から家族機能を量的に検討した報告、特別支援学校に通う子どもがいるひとり親家族の家族機能について質的に検討した報告があるが、入院中の病児がいるひとり親家族の家族機能や家族支援について検討したものはない。

ひとり親家族では、家族の問題が原因で家族員に問題が生じる場合や、社会的に孤立しやすい家族が多いため、家族機能については、家族エコロジカルモデルの視点に立ち、家族システムユニットを包括的に捉えて支援する必要性が示唆されている。なお、家族エコロジカルモデルは、家族と家族を取り巻く人的・物的・社会的環境との相互作用を分析する生態学を基礎としたモデルである。

### 2. 研究の目的

本研究では、平成 24 年度から 3 年間の期間に、家族エコロジカルモデルの視点に立ち、兵庫県内の病院に入院中の病児のいるひとり親家族(回答者はひとり親)を対象として、家族エコロジカルモデルにもとづいて作成したインタビューガイドを使用した半構成面接調査と家族エコロジカルモデルを基盤とした家族機能尺度である Feetham 家族機能調査日本語版(以下、FFFS-J)を用いた質問紙調査を実施した。これにより、質的・量的の両方のデータを収集・分析し、両者を組み合わせ、どのように家族機能を遂行しているのかという家族機能のありようを明らかにし、家族の希望に沿った家族支援構築への示唆を得ることを目的とした。

### 3. 研究の方法

データ収集のための事前準備として、ひとり親家族・入院環境に関する文献検討を行った。この結果を加味して、家族エコロジカルモデルにもとづいたインタビューガイドとフェイスシートを作成した。その後、病院に入院中の病児のいるひとり親家族を対象とし、その親の認識をもとに、家族機能の遂行の現状を解明する半構成面接を実施した。また、病院に入院中の病児のいるひとり親家族と地域で生活している子どもがいるひとり

親家族を対象に、FFFS-J による質問紙調査を実施した。なお、FFFS-J は、3 分野(家族と家族員との関係、家族とサブシステムとの関係、家族と社会との関係)、25 項目の回答選択型質問(全 25 項目の合計が家族機能の総得点となる)と 2 項目(家族の困りごと、助けになること)の自由回答型質問から構成される自記式質問紙であり、家族機能充足度を明らかにすることができる。その後、質的研究、量的研究の結果をミックスするミックス法により分析を行った。すなわち、家族エコロジカルモデルにもとづいて、質的・量的の両方のデータを収集し、半構成面接調査から得られたデータと質問紙調査のデータのミキシングを行い、結果を解釈した。

### 4. 研究成果

#### (1) 研究の成果

事前準備として、医中誌 Web を利用して、入院中の病児のいる家族の家族機能に着目して国内文献を検討した結果、文献は、1983 年から 2011 年までの 29 年間で 5 本と少なく、全て 2004 年以降に執筆されていた。調査法は、質問紙調査に限られているため、質的に明らかにする研究や客観的な指標を用いた研究を行い、エビデンスを集積する必要があることが分かった。なお、ひとり親家族の家族機能に焦点を当てた研究は皆無であった。文献検討の結果から、家族機能を良好に維持するためには、家族のコミュニケーションの促進、子どもに対する心配事の軽減、病児のみならず家族の生活を重視したヘルスケア環境の改善、ファミリーハウスの利用、母親の付き添い期間が長期化しないことが重要であった。

その後、小児科病棟もしくは小児病棟のある 4 病院の協力を得て 2013 年 11 月から 2014 年 3 月の期間に、入院中の病児のいる家族(父親もしくは母親)を対象に約 1 時間の半構成面接調査を実施した。参加家族は 21 家族で、そのうちひとり親家族は 3 家族であった。ひとり親家族のデータを分析したところ、回答者は全員、母親で、平均年齢は 31 歳(25 歳から 37 歳)であった。1 家族は養育期家族、残りの 2 家族は教育期家族であった。病児の疾患は喘息、リンパ腫、ネフローゼ症候群であった。3 家族中 2 家族が病児への付き添いを実施していた。家族機能のありようとして、「家族環境の変化に伴う家族役割の増加」「母親の子どもに対する心配事の抱え込み」「役割過重による母親の健康問題の出現」「家族員の相互支援による病児の入院生活の継続」「社会資源の利用とスティグマの存在」の 5 カテゴリーが抽出された。

次に、小児科病棟もしくは小児病棟のある 6 病院と 11 児童館の協力を得て、2014 年 7 月から 2014 年 11 月の期間に、入院中の病児のいる 243 家族(対象群)、児童館に通う子どもがいる 1,103 家族(比較対照群)(いずれも、回答者は父親もしくは母親)を対象に、

FFFS-J を用いた質問紙調査を実施した。対象群 151 家族、比較対照群 346 家族の有効回答が得られ、そのうち、ひとり親家族は、対象群は 10 家族、比較対象群は 22 家族であった。ひとり親家族のデータを分析したところ、回答者は全員、母親で、対象群の平均年齢は 37 歳（26 歳から 47 歳）、比較対象群の平均年齢は 37 歳（30 歳から 45 歳）であった。対象群の病児の疾患は、急性咽頭炎、小児がん、ネフローゼ症候群など多岐にわたっていた。全ての家族（10 家族）が病児への付き添いを実施していた。家族機能の総得点に有意差は認められなかった。3 分野別にみると、「家族と社会との関係」において、対象群の方が、家族機能充足度が有意に低かった。25 項目別にみると、6 項目に有意差が認められ、身内からの精神的サポートに関する家族機能充足度は対象群の方が高かった。その他の 5 項目（余暇や娯楽の時間、子どもが保育所・学校を休むこと、家事をする時間、仕事（家事）を休むこと、日課が邪魔されること）の家族機能充足度は対象群の方が有意に低かった。自由記載の回答から、入院中の病児のいるひとり親家族の困りごととして最も多い記述は「病児の健康状態」と「仕事を休むこと（自分の思うように休むことができない）」で、助けになることは「身内からの支援」であった。

面接調査と質問紙調査の結果から、病児の入院に関連した家族環境の変化により、家族役割が増加し、家族全体に負担が生じており、特に、「家族と社会との関係」に関連した家族機能が低下していることが分かった。母親は病児の健康状態について、家族の一番の困りごとと捉えていたが、それだけではなく、きょうだいに対する心配事も抱え込んでいた。役割過重で休息がとれておらず、体調を崩している母親も存在したが、付き添いや面会の交代は難しい状況であった。しかし、身内からのサポートが得られる場合は身内からのサポートと、家族の相互支援により、病児の入院に関連した生活の変化に対応し、入院生活が継続できていた。ひとり親家族が利用できる社会資源を活用することで、医療費を含めた家族の経済的負担は軽減していたが、母親はスティグマを感じていた。

看護師はひとり親家族に対する理解を深め、病児と病児の療養生活を支える家族の健康状態に配慮し、家族全体を支援する必要がある。

## （2）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

離婚率の上昇に伴い、ひとり親家族は地球規模で増加している。家族は、家族員の情緒的側面、身体的側面、医療機関への受診や医療費の支払いなどの社会的側面において極めて重要な役割を果たすため、家族構成の変化がひとの全人的健康に及ぼす影響について注目されている。しかし、ひとり親家族の

家族看護学研究は進んでいない現状にある。加えて、国内外の先行研究における研究手法は、量的もしくは質的に検討されたものに限られており、研究課題においても、入院中の病児のいるひとり親家族の家族機能や家族支援について検討したものはないため、量的かつ質的に未だ明らかにされていない研究課題に取り組み、新たな知見を提示できたことは学術的にも意味があると考えられる。

また、本研究の結果より、役割過重で休息がとれておらず、体調を崩している母親も存在したが、付き添いや面会の交代は難しい状況であった。日本では、1950 年に完全看護制度が発足し、1958 年に基準看護制度が始まり、1994 年に新看護体系が導入された経緯から、付き添い看護は廃止されているが、質的研究の対象家族においては、3 家族中 2 家族が、量的研究の対象家族においては 10 家族全員が付き添いを実施していた。現状では、日本における付き添い率は高率であり、ひとり親家族の場合は、役割交代が難しく、ひとり親の健康問題が出現していた。本研究結果は、ひとり親家族の家族支援に生かすことを目的としているが、本来、廃止されている付き添い看護が、現在も高い割合で実施している現状について、その解消に向けて社会全体で取り組んでいく必要性も示唆している。

## （3）今後の展望

家族のウェルビーイングの保持、増進には、家族機能を維持・向上する家族看護実践が不可欠であり、ひとり親家族を社会全体で支援する必要性が指摘されている。したがって、今後は得られた知見を論文としてまとめ、結果を広く公表することで社会に還元し、入院中の病児のいるひとり親家族への家族看護実践において活用することで、このような家族の家族機能向上、生活の質の向上に寄与していく。

本研究の課題は、対象者数が少ないことであり、研究結果を一般化することが難しい点にある。ひとり親家族の協力を得る調査は難しいことが指摘されているが、子どもが入院中のひとり親家族から協力を得ることは至極困難な状況であった。今後も調査を継続すると同時に、対象施設を拡大することで参加者を拡大していく。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 3 件）

Yuko Hiratani, Naohiro Hohashi: Support expected from pediatric nurses by families with hospitalized children in Japan, Asia - Pacific Nursing Research Conference, 2014 年 9 月 13 日, タイペイ（台湾）  
（Outstanding Poster Award 受賞）

Yuko Hiratani, Mai Okuda, Mari Suginaka,

Yurika Sonoda, Naohiro Hohashi: Changes in the family functioning of families with a hospitalized child, 35th International Association for Human Caring Conference, 2014年5月25日, 京都市(京都府)

Yuko Hiratani, Naohiro Hohashi: Family Functioning of Families with Hospitalized Children in Japan: A Literature Review, 11th International Family Nursing Conference, 2013年6月20日, ミネアポリス(アメリカ)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

平谷 優子 (HIRATANI, Yuko)

神戸大学・大学院保健学研究科・助教

研究者番号: 22792227

### (2) 研究協力者

法橋 尚宏 (HOHASHI, Naohiro)

神戸大学・大学院保健学研究科・教授

研究者番号: 60251229